町長室からこんにちは No.102

一宮町長
馬淵 昌也

先日、ある会合で東金に伺いました。会場は老舗の料亭でしたが、懇親会に及んだところで、驚いたことに、そのお店では、女将さんが自ら三味線を弾きながら民謡を謡い、それに合わせて仲居さんが踊るというおもてなしがありました。

こうした、本格的な芸事の披露でお客を接待するという形のお店には、わたくしはほとんど伺ったことがなく、その伝統様式にびっくりするとともに、かつての隆盛の名残ということで、改めて往時の東金の繁華に思いを馳せることとなりました。

ところで、その会場に、たまたま尺八がおいてありました。わたくしは大学時代に尺八を少々稽古したことがあり、昔取った杵柄ということで、音を出してみたところ、音程は正しく、管はちょっと傷んでいましたが、演奏には差し支えない状態でした。そこで地歌「黒髪」を吹いてみましたが、ほかの出席者の方からの強いお勧めで、さらに女将さんと合奏することになりました。曲は千葉県民謡ということで「木更津甚句」を合わせました。大変うまくゆき、皆さんの喝采を博しました。

面白かったのは、それから、ほかの出席者の皆さんが、負けていられないぞ、ということでしょう、それぞれに心得のある楽器を手に、演歌や歌を披露しはじめられたことです。ある方は女将さんの伴奏を得て、ギターで「湯の町エレジー」を弾き語りし、ある方はフォーク調にギターをかき鳴らしながら、「乾杯」を熱唱されました。

こうして大いに場が盛り上がって、かくし芸大会のようになりました。わたくしは、この方がこういう芸をお持ちなのか、と意外な展開に驚くことしきりで、大変楽しいひと時を過ごすこととなりました。その時は、聴衆がアーティストの歌や演奏をひたすら聞く、という二分法が崩れて、演奏者になったり聴衆になったりという自在な交代があったことが楽しさの要因でした。もちろん、皆さんご存知のとおり、カラオケにはそうした構造がありますが、今回は、なんといっても楽器の披露も加わっていたところがさらに場を盛り上げることとなりました。

色々な芸事を身につけておくことは、皆さんをチアフルにする素晴らしいことだと、深く納得したひと時でした。